

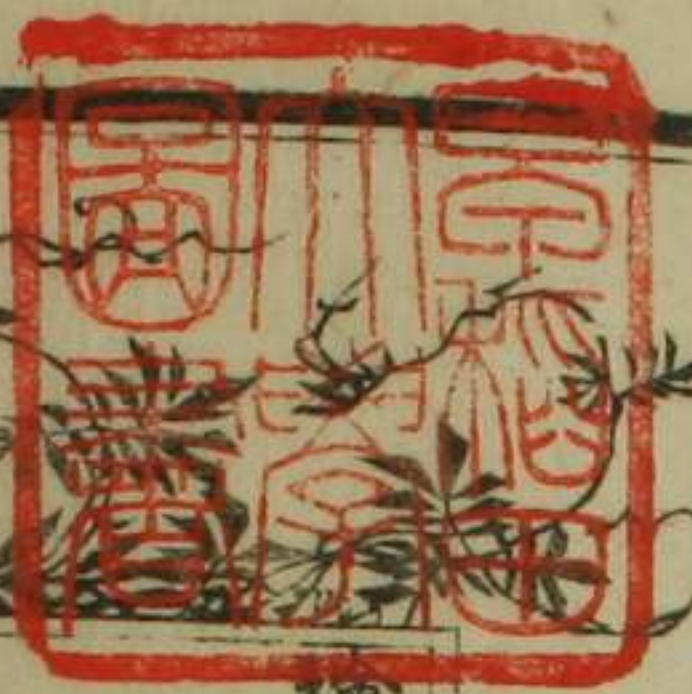
繪本拾遺信長記

四

~ 19
3564
17



門 13
 號 3564
 卷 17



續奉拾遺信長記後編卷之四

目錄

重幸感奇爰來

日圖

秀吉播州平定

秀吉信石山討手事

日圖

秀吉福之野次

日本書紀 日傳卷之四

早稻田大學圖書館
 昭和 34.6.3 燹
 藏書

重幸再感奇愛事

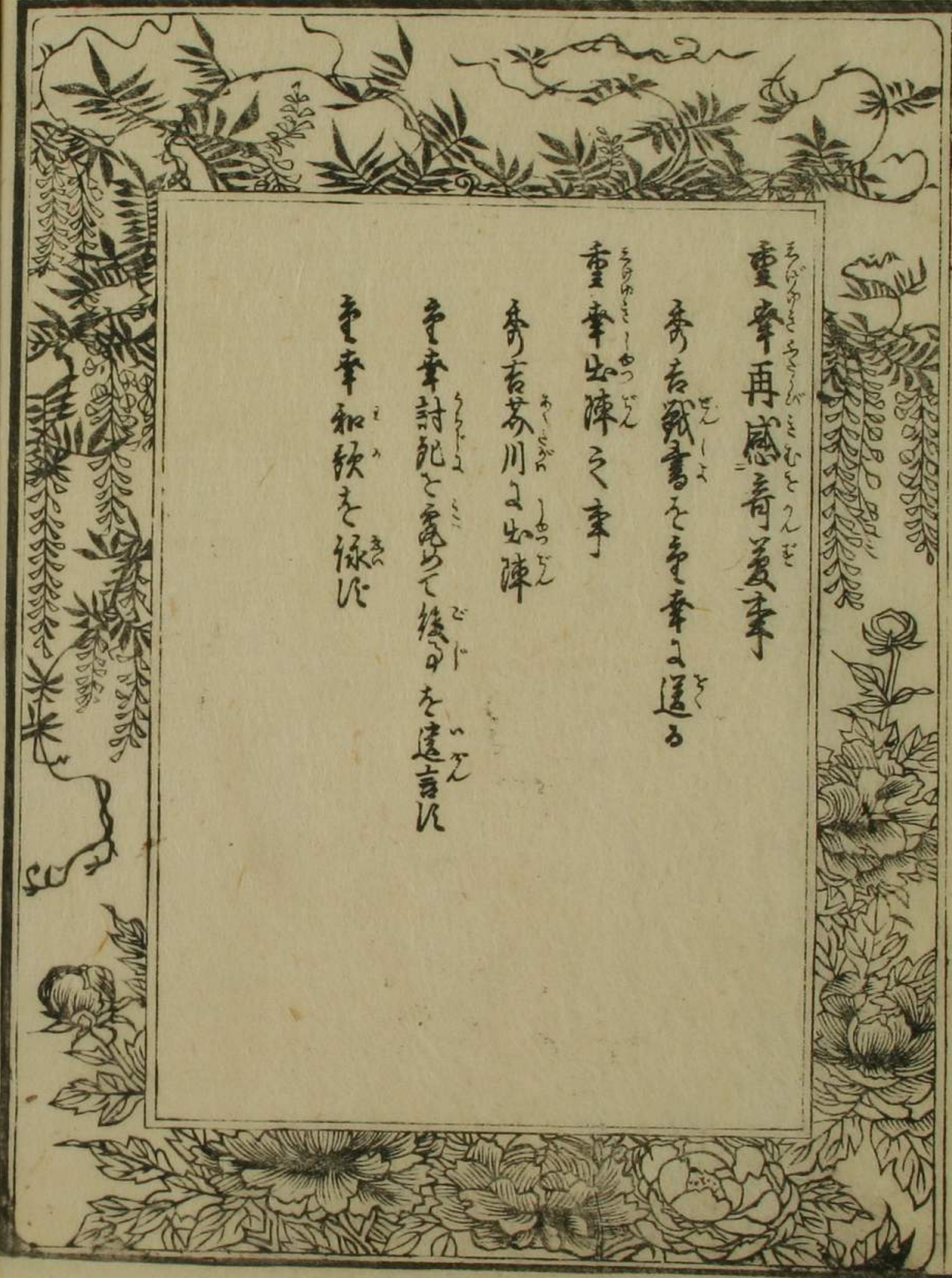
奇吉戦書を重幸に送る

重幸出陣之来

奇吉若川に出陣

重幸討死を以て後代を達言に

重幸和歌を依に



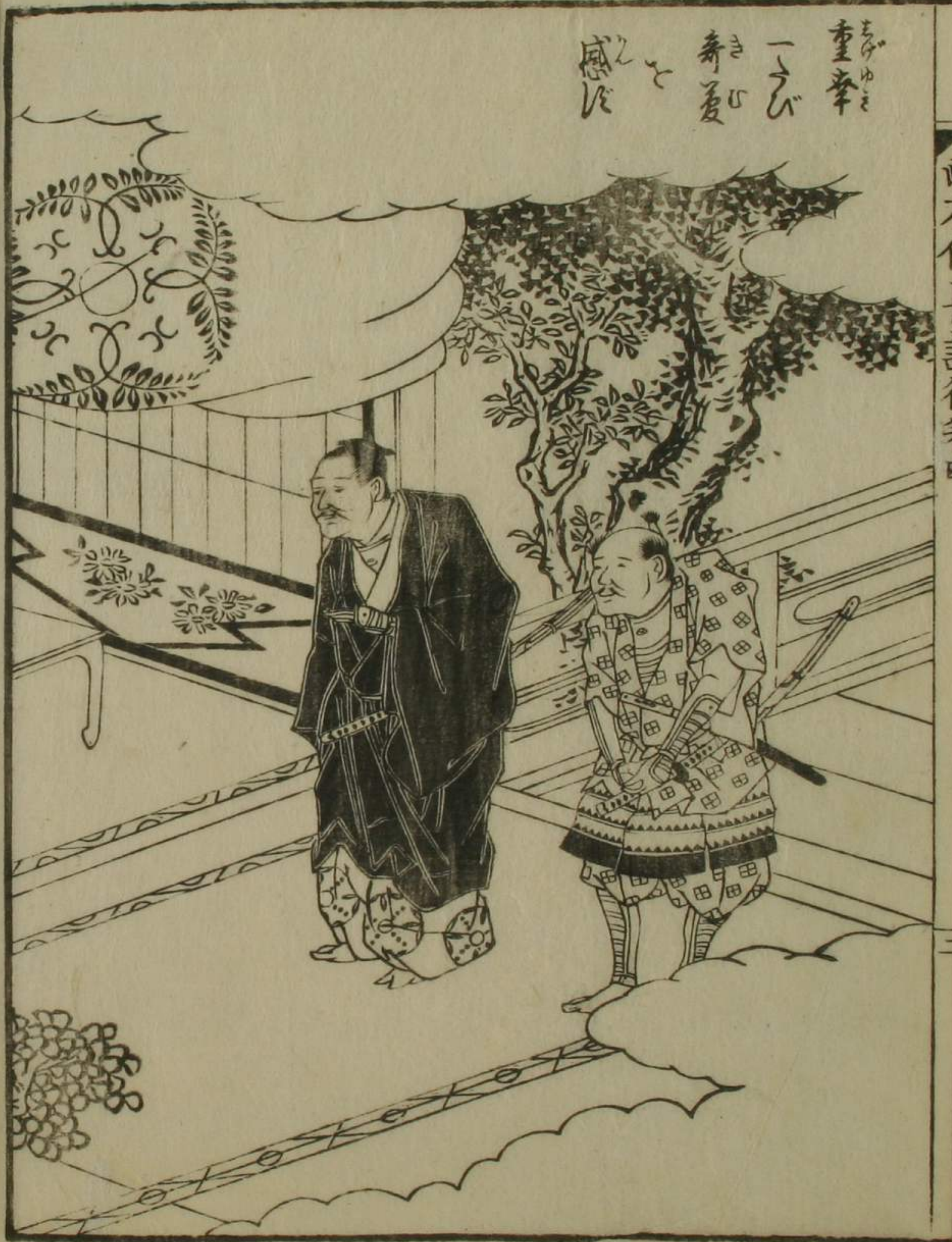
繪本拾遺信長記後篇卷之四

重幸一感奇愛事

上人と家老下間とを以て筑城乃末寺門下の軍おと集り
結ひ信長が口を逐一と若て是れ乃平溪及び結ひ下
同安察使法橋進と出て中々の信長が誠る口上り振さ
一義理りうは安人ゆども返覆さぬ不実の大なるれ
又出陣用きいりあぐりは是れ先より朝倉清兵衛の
家と謀計を以て和睦とほし其誓書の墨痕いまだ乾ざり
あ家と討とく其國郡と奪ひえりけ度乃後とくも
信長が心をうり難くゆり其れは御用城乃後事
あぐりは安人と討と放てやる給本重幸是と使て法橋の仰む給乃



通本言又已



重幸
一之
壽
感

通本言又已

石理又當りむ乃後よこそ人若にも言と然せしとく信長
 尚城と責為凡べき計策又盡き上人と歎き地石へうり
 不意に記ゆ討まん謀計にてい中も嗚呼がましくもい
 どり信長いう又妻もとも信心乃門系力を盡し防ぎまひり
 某かくてい上の幾枚十年攻戦とるとも何乃恐さうい
 和睦と計る信長又利ありて尚寺又抄して甚不利之和平
 不義知乃後あく仕出さし使者と追ひし終ふ由信長
 怒りて大軍と記し向ひ来りば是又辱むに其一計と由
 其軍兵を粘陣と後」搦又係」も信長を斬て法款乃
 根と断んし又難きやあぶらびと席ととんで言とれは一
 乃末寺門後乃軍おいさし終ひ後又評議の一定せり爰又抄ひ

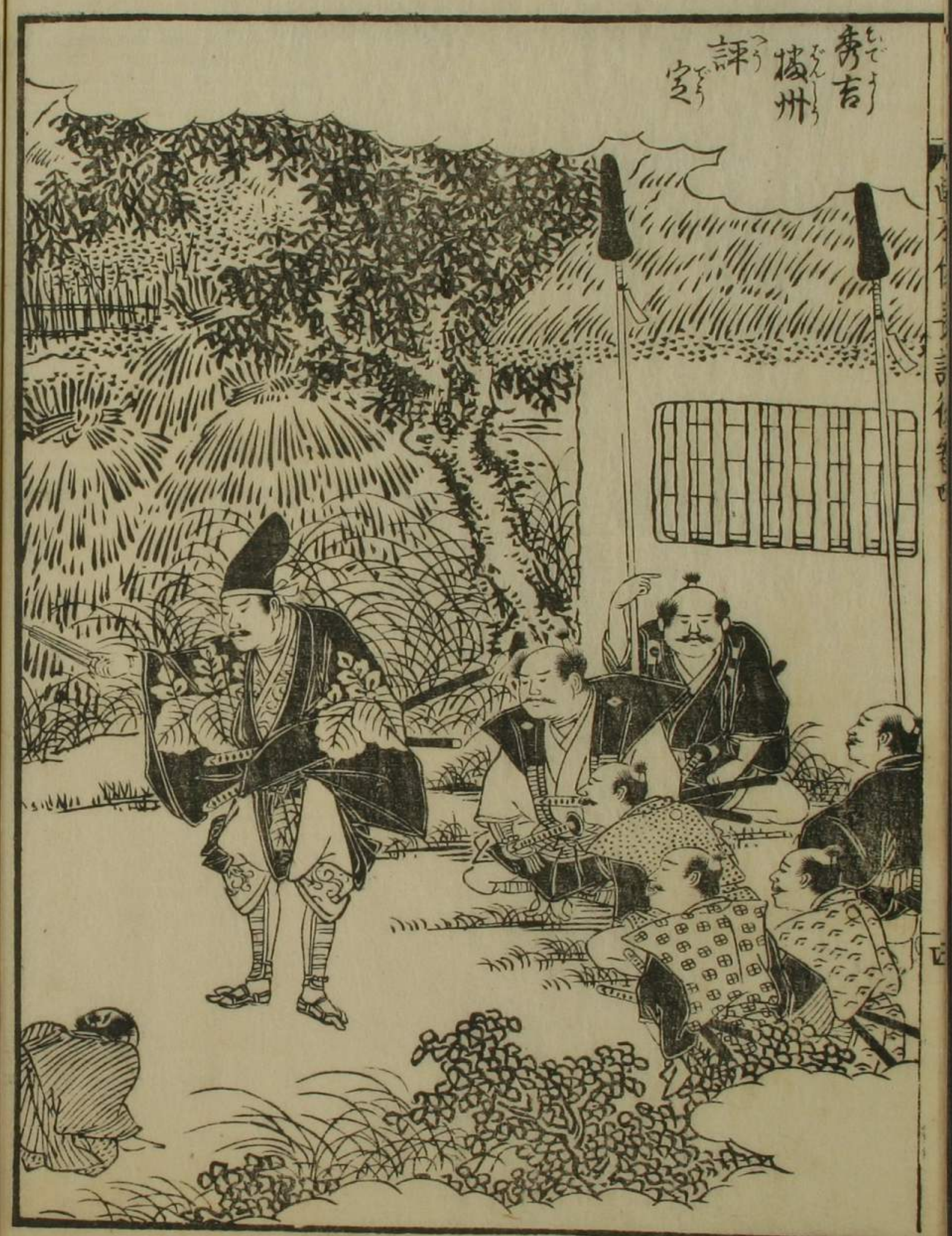
て上人下間刑部卿又信せし小田乃あ後へ返送し終ふ由の
 信長の心慮取り感劇あさうに法所の力を以ていせり
 後を好しやん和睦乃後えより終ふに志しなぐり
 小田家と合戦又及ぶの終り尚寺よりあうて云の軍と討し
 あはらうに信長尚寺の境地を乞辱せりといふも佛勅の
 方れは地又後えんを歎き辭せしより信長三好誅伐と号し
 後又軍馬と入給ふ其尚寺と責むべき結構之れは家恩と感
 づる門系云として法款と稱し終る数年乃國戦とはなりぬ
 是より尚寺と用き地境又後にはしきおむりうれは今
 境内と拵げやべきうのお成やまじきうてい尚寺又抄して
 候よし」是と和睦お潤へべき後よりの委細も命又後いへり

圖本意... 四



五

秀吉 播州 評定



石山の嶽中少は信長今度乃返着とばいよ〜い〜門と
 大軍と引て攻来りし其用意こそ肝要なれと夫の根と磨
 き鉄炮の筒をさらへて今や〜と待居りし就中於本重
 幸の帷幕の内は謀略を凝しけし乃戦ひこそ然世の大
 勇なれしは道不恩深の妙計とばして目覚る計の云戦を
 初ひ信長又子を櫻〜むらう若く討殺して承く京門の
 障り除んしものと腹食を忘る引新里て又まをせししつら
 心つとてや妻事によりる〜まごゆもたる若く其姿端心
 傍一ツ乃短冊ともしりげを幸が案の案に安枕と成して
 勤く身はしを幸つ〜其傍の面顔を見んる小幸守に安

匠を侍る親親上人の御像は相相〜り被傍に持
 短冊と机のよに並置け秋の心とまれるや〜と幸を愛心
 又短冊と名とまれば

義上川人をなせし稲船の入りて沈むあところきり
 と上代のほして書〜り幸不恩深よその傍の各各同ん
 とも射忽然として幸とあり若く若あり幸目成開き之
 と〜し下回少進法橋を幸幸と現の隙と希〜先れと流
 て同て曰く法橋〜るるのゆて疾中我陣中又来り〜入や
 少進の云く今日は乃の門後より進進せし信長出寺乃返
 言を勝りけ度い乃と極てし石山成夷落と〜ん軍と返
 じと折言いと又又畿内乃勢い云よ及び山東海小濠の

勢又播州丹州紀州等の軍兵を係せ其勢三十余万人不
日又押せ勝負を一挙に交せん其懼甚急んと告きこ
り仍て今日城中の諸門系上人の計を又集り軍師と
言ひ人々中々上々れごと人のけしき軍師の謀略は心非と
勞し終ふを痛し終ひ信長大軍を以て押おんゆえなり是懼の
りて改め務くを死後にははしなき譯は軍師の心を
活しめんを要はしとく諸門後とあり合我の譯は及ぶ
と人々智識く計拙くて奉交又一定せし今日の集會にて止す
某處よ来る軍師の謀策を聞んて友の眼を妨げま罷附より河内
を率領し信長陣へ天下の軍勢としくを集め候ふをせまら
打崩さる甚き我既し諸事と構へ候より然れども爰よ不
一ゆありて我心より一交せば今宵何ゆを高議ぬれども爰よ
明日御弟にゆくを計るは法橋も先陣を以てゆり心よく候た
爰よ抄ひく少進少し心を保んといまを告て立入ると奉
陳外と送り出再び案にゆり爰の内の秋を按じり小忽月
暗く心遠く心痛り甚し急よ人を呼く自ら兼方と立洞合
せしゆ烈火を以て沸きさせ一連の二歩は腹に良痛と忘
ふ如しれと率又四又後とらゆを得ば是より病の床に臥
秀吉請石山討手事

此時羽柴勢を率秀吉の去る十月より播州を揚り彼國よ
下向せしが忽ち國中乃人候を以て國を固め政道と心
百勝と極
脛し從丹後但馬の國と斬たが其威凡ふ陽山陰乃
画本言長尾後六十四



西之仙十言初巻四



西之仙十言初巻四

七

あつひしうの信長甚感と移ひ河飲びの余り安七の城を以
考らば復讐恩賞とまぐく之を表面目を遊し去つて安七
藩固してあつひしが信長とあは石山和勝の城に於ては
兼せざるを以て月素の懐怒十倍し河を以て属せし國の軍兵と
石登され大軍とて石山に向ひ移るが如く河に
これを見んと眉と去りし處に諸國の強敵いまだ平定せざりし
るき坊主とおむに軍兵と勅し國の費を顧みずりこそうは
けはいふ小見して流らむり河を向とてふも人し信長この河を
出て言はしつるの備もけりし河城中に安七を本親寺の如く
ありしと承り移り移り入るは若天下の武を以て坊主とて
云はしとて又はし移りて河を感ずるとたぬ何ぞ河津代乃

河下知これなりしや信長等て宣ふと我いりて是と捨をく
を以て汝よけを計んとて人し河を止むべきを恐るる教て
語らば我今度石山に交向し如く首を以てんが折去て軍と
ゆはしとて石山東海小陸乃軍勢を集めると安七乃
武士少くは石山日又大軍と令し彼城を踏崩し日既の勢を
教に遊し汝も又供とてと終つる小安七を以て移るる及ひ
中は安七君知しつらつりし河に長足とて承りし人其先鋒
よとて一番の坊主首と引しげ河上境に入ると去りし
安七を以て按ぶるは彼も石山一城外に馳くる勢なりし
勢城せる軍の武の法師あつひの百姓とてしき武士とて一人
を以て移るるを武の河を以し諸國の軍兵を集め河に征伐

とは勿神なき次子又は若者なく御勅命とぞららるる其れ
 仍付らざりし是程乃小幡系為さぬのいほははらば某が
 並河渡の緩き大軍をひて征し終ふとも匿きやいふと
 多に女中うに言ふとん信長云汝いふる計略をひて石山とぬ
 うんとどりや秀吉の曰く某が謀り諸大ぬり計策に失はれ
 年京都よみく御目代を勤めたりし時度く石山に控す
 然如上人の人とぬりと知さう其性温潤にして悪意沸く流石
 一宗の棟梁利又交り俗心はあはれいれしが救身の救ひ
 令く然如が斗いふとていふ皆珍本源花湯門とて浪人の
 せりあはれ浪人と何なる者と無しはそや紀州及白山の
 零落し朝三暮四のとうりてふ迫り斬る強盗をいはしてん

ちよおろし我君を救すといふははしと伊出の秀吉の
 歎け一向宗門の信者と仍り然如を欺き合戦をいふと今日
 又いふては珍本が不敵とていひ勢ひと得て勝利令く子孫
 富貴を絶えし若お頂て居城とて然如一人の換身して
 珍本がぬれ多に何れに勝り利之負るし利之と金全の
 悪心をさしたる長神乃然如魚味の門徒と欺き國家の大
 命を顧ざる嗚呼の若くそは某が一處に彼珍本と引たり
 出し首を刎てとて中絶しは者一人を亡し討つ石山の中
 あり被珍本が生捕り死凍略の只今口外被がし勝軍と
 術へは後必し合さるいふと後で言ふせり信長をばせられし
 先秀吉が辱しよまうせ其子術と見らばしとて即時二万余



去分ゆき
重幸
病
外

園林信長言初巻四

人の道年をよみたるく勅府と見合せ給ふ

重幸再感奇後幸

詮本源尾湯門尉重幸の勅年非氣を勞せしあり心痛止は
附しての吐血を以て取如上人甚心と疼り給ひ附く重幸の病
愈又毒く世給ひ病乃倅と同い給ふ重幸姑泪とを流り
死を以てけ恩と報とにしと申はより又余の言案はし附又一筆馳
奏門く歎ぬ羽柴籠首書と軍師の件又指せりとして封せ
書状と差出は重幸受て羽柴の書状見給ふ乃候ははししと
右の封と切て披き見る其書は曰く

一別後良不得對面洲多日致快脱はけ度主人

内府云石山城中之懐計議廻集團く之軍兵は十

抑 内府者天下之武將也一怒則崩壁城之強固足
不謂哉

勅命以也足下於兵法軍略雖不讓于人何犯

勅命拒 武將之威乎哉終可為宗門基破滅足下盡

智術如助宗門而返滅宗門者也况又仇世若武豈能

得佛意者云乎故今 内府云怒足下而不怒本報寺

矣欲報足下而不欲盡本報寺是以有足下為敵為

敵也諺曰高木所折凡揚揚不折雪於不為足下者

今本報寺矣實有重宗門盡忠節之心者出城而可

遂清白戮死矣不盡多言希照察而已

天正六年三月廿日

羽柴籠首守秀右



日本書紀卷之四



送又幸重
秀吉
我書

日本書紀卷之四

珍本源左衛門殿

重幸讀終て漸暈^{あはれ}と終に長歌^{ちやうか}「さうらうらう香^{かぐ}我^{わが}最^もと等^らふ
 とくくを理^り又^{また}遠^{とほ}きう我^{わが}元^{もと}より是^{こゝ}を^し知^らずうふは^はわ^らう^は福^{ふく}と信^{しん}
 長^{ちやう}虎^こ狼^{らう}乃^の心^{こゝろ}を^た抱^かき^し人^{ひと}を^あ欺^かん^んとい^いて^うこれ^を余^あに^いはん^や
 止^とむ^らう^らう^ら勢^{せい}ひ^ひ以^もて^て我^{わが}ひ^を助^{たす}る^{なり}我^{わが}ま^まと^し秀^{ひで}若^{わか}が^が言^{ことば}ふ^の如^{ごと}く
 我^{わが}今^{いま}討^う死^しして^し沖^{おほ}方^{かた}を^た括^{くわ}る^は深^{ふか}土^{つち}う^らく^は信^{しん}長^{ちやう}和^わて^て人^{ひと}と^いは^まさ
 ま^まれ^とて^いは^はして^て可^たう^らん^きと^おの^のま^まづ^うい^てあ^りら^うら^うと^おも
 う^らう^らと^お生^なし^し憎^{にく}み^まご^らひ^ひ愛^{あい}心^{こゝろ}と^おも^も愛^{あい}見^みし^し憎^{にく}の^の母^{はは}は
 さ^まみ^とく^くを^を幸^{さい}が^が本^{もと}に^に座^ざし^し又^{また}和^わ歌^か一^{いつ}首^{しゆ}と^と市^{いち}に^に幸^{さい}多^たに^に
 て^て見^みる^る其^{その}歌^{うた}と

世^よに^に活^いけ^る民^{たみ}を^をた^とく^る心^{こゝろ}と^とや^やぐ^ぐと^との^のり^りた^たま^まと^とかり^{たり}

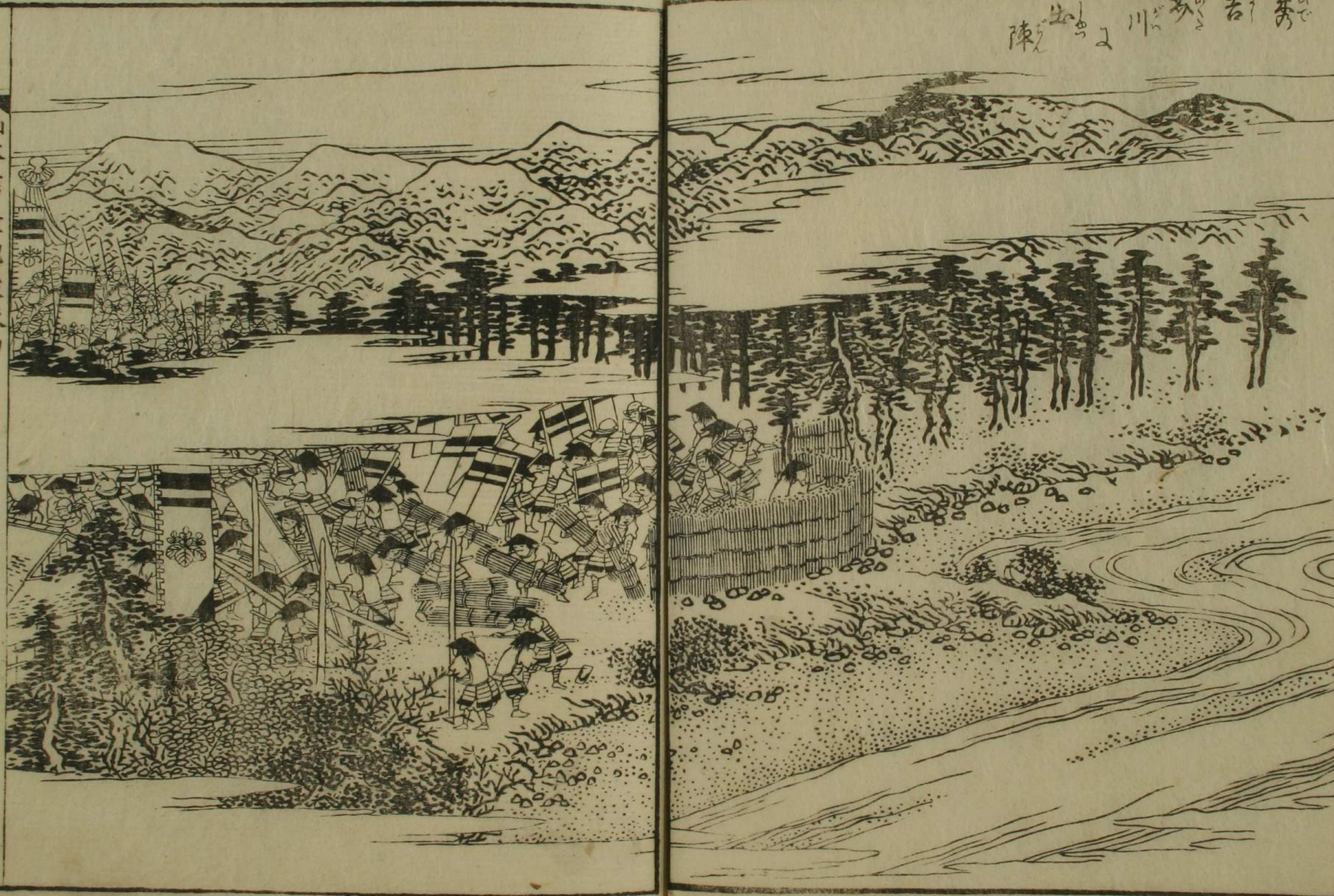
と^と吟^{ぎん}じ^じ終^はる^る附^つ忽^{とつ}然^{ぜん}と^と驚^{おどろ}き^き羨^{あや}み^みら^らう^うり^りを^を幸^{さい}再^{また}び^び奇^き羨^{あや}と^と感^{かん}じ
 曉^{あけぼの}惚^ぼと^と心^{こゝろ}碎^{くだ}る^るが^がど^どく^く多^た分^{ぶん}括^{くわ}ひ^ひく^く按^おし^しと^とれ^れは^は先^{まづ}の^の愛^{あい}見^みし^し歌^{うた}は
 續^{つづ}後^ご撰^{せん}集^{しゆ}よ^よ入^いら^らし^し我^{わが}我^{わが}が^が歌^{うた}を^を深^{ふか}計^{けい}と^とて^て人^{ひと}と^と欺^{あや}ま^ます^すに^に
 む^むる^る者^{もの}の^の却^{かえ}て^て己^{おの}が^が力^{ちから}を^を括^{くわ}ふ^ふと^とい^いま^まし^し今^{いま}の^の歌^{うた}は^は續^{つづ}古^こ今^{いま}集^{しゆ}
 よ^よあ^あし^しひ^ひ入^いら^らし^し世^よに^に活^いけ^る民^{たみ}と^と佛^{ぶつ}ん^んど^どの^の心^{こゝろ}の^の者^{もの}と^とま^まし^しの
 佛^{ぶつ}者^{もの}と^と中^{ちゆう}務^む卿^{けい}の^の詠^{えい}と^と終^はる^る和^わ歌^かと^とれ^れと^とり^りら^ら秀^{ひで}若^{わか}が
 遠^{とほ}る^る亦^{また}乃^の文^{ぶん}の^の意^いと^と符^ふ合^あせ^せる^ること^とを^を不^ふ思^し議^ぎと^とれ^れ心^{こゝろ}に^にく^くる^る祖^そと^と人^{ひと}
 秋^{あき}魚^{いそ}見^みと^と若^{わか}守^{まも}り^り京^{きやう}門^{もん}永^{えい}久^{きう}と^と計^{けい}終^はる^る廣^{ひろ}大^{だい}乃^の佛^{ぶつ}若^{わか}若^{わか}人^{ひと}
 と^と愛^{あい}み^みと^とく^くえ^えじ^じめ^めて^て迷^{まよ}ひ^ひの^の雲^{くも}ひ^ひら^らけ^け晴^は夜^やと^と月^{つき}の^のさ^さし^し出^いで^で
 お^おう^うく^く心^{こゝろ}痛^{いた}の^の病^{やまひ}忽^{とつ}ら^ら急^{いそ}て^て關^{せき}控^{かへ}と^と出^いで^で後^ごに^にぬ^ぬ奇^きなり^りと^とい^いふ^ふお
 海^{うみ}なり^り

重幸出陣之事

以て天正六年春二月羽柴菟尾守秀吉とて石山の討
 と乞ひの勢六万余騎を引率し松州茨川まぐ出張しこれに
 信長云よりいし倭を以て信忠御及び石山氏を圍む諸大
 將へ仰せりやうまゝの今度なる旨ありて羽柴秀吉茨川
 まぐ出張せしむるに秀吉が相後又就て戦ひをたしけ
 忠勤と勵むしとの御事人信忠御其餘の諸大將も謹で
 命を令に耐え石山の城中には信長は度の大軍と引て發
 向とてしと乞ひ居る小羽柴菟尾守秀吉の軍兵とて茨川
 又陣とてしと伊城中の將率大木小多はしし強勢經惠の
 信長もとりてに盡し申さんとうぐしき軍兵もしし向けに

向う出馬もなきはいよくと並又戀しめたるん今
 恐らくは是れと勇とる軍師を率既を以て羽柴菟
 尾守の爲困り歎えりて城中の諸率小將とて將に
 ゆしきたるを引出せし味方の大ねいづとも武勇終倫
 と人も秀吉が相多にりて我小清の意とて出張して
 秀吉と雌雄と交ひし諸ねりて城と守て信忠其外の
 歎めぬ防戦とてしとと上人の御前に出る右の次第を
 言しし心中には只今生の御事とまがひえと乞ひそれこれ
 又死後の計策などこまぐやと退て出陣乃用急に及び
 ろるが鈴木孫市志摩と即即兩人を密にまぎりて
 汝達とてしめし難賀の一黨今度我僧と應じ忠戦と勵

秀吉 河原 出陣 陣



日本書紀卷之四

日本書紀卷之四

十五

信長が怒り何れも是又去らん此上弥忠勅急りて京門退
 精方く承久のそりてこそ感要うし某の明日小清水へ出張
 系の方と討戦しそゆよく討死を遂べき人人を始ち城中
 の諸おいさち止し人ききやを思ひて若て清くはと人をも海
 面人も我賊心の者なるを以て奥と告て後の計策とも候せんこ
 以つて信長が有りさまをさる小朝臣の補佐とし勅命と
 稱して國を征伐する小將の款戦とのまはぬをせは終り
 の賊をせはとる者はしし信長の勢ひ強たつて少しも賊
 どもも「就る小当燃又抄いとい教奉降先を交へ相戦とい
 へども宗祖の徳つらまろく九計の信長一度も全き勝利
 なく御奉と去らゆいなくと云教とまろ信長勝り候しと

へども中國は毛利の大敵ありに國は長曾我部九州は大方勝
 をはじめ武とまろき勇と逞くも若少なりは成に信長將く
 勝りと抄入居るとも終りは志と得る九國西國と斬断へ
 天下乃兵と併せ出陣を美討ん又誰より先と防ぐべきや
 さいへと毛利勝陣が軍又易者の款より却て信長とに
 天下は英名承ふらんも計に「成は出陣の上斗と按とる小
 信長が怒り辨を家世の形勢と頼ふに如くはつるを
 今信長が悪むもの其一人かり我軍門は出さ討死せば信
 長が怒り其は成解に「抄戦戦いの郡國と争ひ威と輝ん
 とまろ武門の國と異なり一日合戦止まらば人命と救ふ
 いくなく乃私徳そや私の心とまろ徳と積る成終り時必

日本信長言後卷四



圖本信長討後卷四



重幸討死
後を
遠く
に
討
死
す

圖本信長討後卷四

十七

諸佛諸天の加護ありて京門長く懸榮とん」（弥達）二人
 我討死せし後、望く守門く出く我ふりなり。信長は
 美来りて、急又迫く、我いまも用ひざる。妙計教多冊と
 あり、け画又我なり。時又徳ん、用ひ強又勝利と求る。中
 なら、信長退る、向きよ、門く望く守り、追討伏兵、奇計と
 以て信長を怒し、しる、有り、べく、此は送ま、と、人とも多、の
 ぬ、死せん、と、時、其、啼や、悲、と、さ、り、必、多、困、又、安、り、勿、と
 是、ぞ、美、初、の、別、も、なり、と、く、扱、を、な、て、あ、人、な、る、孫、市、と、な、り、
 即ち、驚く、り、大、方、なり、此、扱、を、り、て、又、よ、ま、へ、き、言、信、長、市、人、に
 夢と、吾、で、後、ろ、ろ、が、ま、に、即、漸、面、と、上げ、沖、遠、言、の、報、を、漢、ん、で、令、
 兼、侍、り、て、ん、る、強、て、心、と、用、ひ、強、へ、り、り、此、か、く、突、急、の、突、る、と、い、我、

いく、止、り、や、り、り、も、止、り、終、り、候、い、ま、は、し、く、こ、も、免、へ、い、と、志、り、し、
 なる、と、人、を、た、じ、め、事、せ、出、陣、中、の、下、六、万、余、人、信、長、の、大、
 敵、と、恐、も、ざ、り、は、美、願、一、人、を、な、て、今、若、討、死、と、嘆、く、は、し、終、り、
 と、安、り、り、育、の、扱、を、な、し、似、く、誰、り、指、揮、し、て、防、戦、を、勵、む、べき、
 又、信、長、の、疎、忽、なる、美、殿、一、人、と、討、た、り、と、く、け、候、よ、本、教、寺、と、
 三、石、之、き、り、の、に、り、り、此、程、く、急、よ、美、浩、来、り、終、り、は、居、城、と、や、
 及び、や、べ、き、智、者、も、ふ、急、と、ん、が、一、身、り、り、と、兼、り、以、り、今、一、懸、突、
 急、也、と、ん、る、い、り、と、や、り、り、此、程、を、教、院、を、お、り、足、下、某、と、候、
 報、り、り、其、過、り、我、お、命、し、て、あ、り、り、も、信、長、一、心、と、激、し、精、
 カ、と、盡、し、て、美、来、り、一、朝、り、り、け、城、郭、焼、去、り、り、ん、元、来、り、下、
 又、羽、柴、籠、守、り、守、り、我、智、術、の、堂、火、の、光、の、ぞ、く、秀、吉、の、



木下野原



日本信長記卷四

十九

英方の明月の空に輝ぐと何をもて敵討とんき志のこころは
 彼秀吉の天の助けあり地の應あり小陣よと洋雲たふ
 びき揚屋現び今天下こそく恥ろと人とも終又天下と學極
 せん若り秀吉よこそと見露ゆれさきハ秀吉と討敵しと
 忠節の死といふたよく「渠が心と感動せしめんこそ本敵奇永
 久の謀かり我ころ既又交せりきて止るのうられ愛よ抱い
 とあねも再びえん言系しゆく書讀したる一冊こそ是孔ぬ
 が神囊の計とと恭教清純ゆ又よ別この酒宴とにじゆ漸く
 耐とろうつとろがたやぬこの近つとるれば重幸とや出立の
 用を以て先陣の根素乃小密茶三百余人中陣ハ重幸又百
 余人孫市与郎あふは細やく小計系と授け二百余人後陣

又浦人都合其勢一ふ余人威風よくと出立つり重幸は人
 を限りの戦いられはと重代の獲外の花威の著よりと
 と芝指長と着下しと内を以て陣の境と居首と着下し赤羽の
 花後と入るち方と帯て馬引をせと繋うんととればとや赤雲の
 空よびき後り橋が向の多の著も又とるやく小おとつとにと
 りのあつとや重幸志に「おとつとれと
 これやこのうたせの外の表をんとこのおとつとるのさ
 とらん派ととてくひらりとおとつとる城門ととてくひらき小法
 あとと出陣は

繪本拾遺信長記後篇卷之四終

